森林資源は生業を作ることで自然の豊かさにつながる

特定非営利活動法人 吉里吉里国

理事長
芳賀　正彦さん
はが　まさひこ

岩手県の大槌町は、三陸海岸のほぼ中央に位置する人口 1 万 2 千人ほどの小さな町です。震災時、大槌町にも大きな津波が押し寄せ、山と海が入り込むリアス式海岸ゆえに津波は陸に向かってさらに大きくなり、町内でも沿岸部に位置する吉里吉里は 20 メートルを超える津波に見舞われました。

町の 3 分の 2 が瓦礫と化した吉里吉里ですが、いち早く住民有志での支援活動を始めています。震災直後は、生きるために瓦礫から薪をつくって燃やし暖を取り、のちに任意団体「吉里吉里国　復活の薪」を立ち上げ、薪を販売して生活の糧を得るという活動に移行し、2011 年 12 月に NPO 法人を設立しました。

現在の活動は、副業的自伐林業、薪の生産、森林環境教育などの活動に発展しています。

震災後は瓦礫廃材で薪づくり

大槌町は、全面積の約 9 割が森林で覆われています。その集落の森の約 7 割は、地元漁師たちが所有する民有林です。しかし、街では人口流失がつづき、山も 40 年来放置されたままの荒廃した森と化していました。

「震災で何もかもなくなってしまって愕然としていた時、町を見渡せば、山があった。震災前と同じ姿で集落の森があった。」と理事長の芳賀さんは語ります。そして森と共存しながら森で暮らしを立てる、助けられた命を、遺してもらった人生を森で活かそう！と決めたそう。

震災直後は、瓦礫廃材などを薪にして避難所で焚火を続け、その後、4 月に岩手県が避難所で暮らす被災者のためにドーム状テントの入浴施設を設置し、薪ボイラーの機器を導入したことから、吉里吉里国も毎日薪割り作業で貢献。この「薪の湯」は避難所が閉鎖する 8 月まで 5 カ月余り続きました。

この間、「この薪は売れるのでは？」という声が上がり、5 月に住民有志 12 名で任意団体「吉里吉里国 復活の薪」を設立しています。以降、津波塩害林の木を伐採して薪を生産し、「吉里吉里国　復活の薪」として販売を始め、薪割りボランティアとして多くの人々が協力しました。この「復活の薪」の販売は 9 月までで 50 トンにも上り、作業に携わってくれた被災者の方々に、売上代金は作業代としてそのまま還元することにしました。その方法として地域通貨券(商品券)『吉里吉里銭ンコ』を発行し、地元の商店の復興や地域経済の活性化にも役立てました。

8 月に入浴施設「薪の湯」が終了した時、薪ボイラーの点検整備をしながら「津波で塩害があった林の伐採や荒れた森の木を活かすためにも、何としても薪ボイラーを復活させたい！」と願い、薪ボイラーを譲渡してもらえるよう働きかけた結果、幸い譲渡してもらえることになり、保管することにしました。吉里吉里国はこの年の 12 月、NPO 法人となっています。

▲吉里吉里国作業場

▲薪割りボランティア

荒れた里山の間伐

2013 年に入ると、地域の民有林である山の放置材を有効活用し、薪として販売する路を開き、地域の生業を創出することで町の活性化を図ろうと動き出しました。まずは山での間伐作業をする山チームを作り、その薪を袋詰めして販売する薪チームの出番です。この先には、限られた森林の永続管理と、その限られた森林から持続的に収入を得ていく「自伐型林業」といわれる副業としての生業に繋がっていきます。

森林は、苗木を植えてから樹木が育つまで長い年月がかかり手入れが必要です。枝打ちや間伐などの手入れがなされ、林に光がさし、地面には多種多様な生物・草木が育つ。そして森は豊かになり、山から養分豊富なきれいな水が海に注がれ、魚介類の健全な発育を促す。昔のように薪を使う暮らしを復活させることで資源の循環ができ、この地域の持続可能なサイクルも見えてきます。

「薪の湯」の復活で薪ボイラーの出番

2014 年 4 月、大槌町が 82%出資の第三セクター会社「復興まちづくり大槌株式会社」が復興事業従事者のためのユニットハウス「ホワイトベース大槌」を開業し、施設の 1 階にある共同浴場は、薪を燃やして給湯する仕組みが採用されました。

実は、当初の計画では通常のボイラーでの給湯を想定していましたが、吉里吉里国の芳賀さんは、「薪で沸かした柔らかいお湯でゆっくり温まってほしい！」と、以前から大事に保管していた薪ボイラーを提供する申出をしました。町は、「それが、震災直後の生き延びるための期間中、我々避難所生活者を温めてくれた薪ボイラーへの恩返しです。」と語る芳賀理事長の願いを叶え、薪ボイラーを設置し、薪を焚く作業を吉里吉里国に委託しました。

以降、毎日 17 時から 23 時まで、主に 70 歳代の薪チームが交代で薪を焚く仕事についています。まさに地元山林の薪を利用して沸かし、エネルギーの地産地消に取り組んでいると同時に、働く場を創出しているのです。

豊かな森の保全と継承の人材育成

森林を守るにはそれを維持・管理する人が必要です。芳賀さんは、失われつつある暮らしの伝統技術や林業技術の普及、そして後継者を育てるための林業学校を開校し、「チェーンソー取扱い」講習会などを開催しています。

一方、自然の豊かさ、厳しさ、森林資源の素晴らしさなどを子どもたちに伝える森林教室を開講するほか、大槌町教育委員会との連携で、学校に行きづらい子どもたちに対して薪割りや創作等自由活動の場として支援する活動による次世代の育成にも取り組んでいます。

津波にあった被災地は海とともに森林が資源としてある山間地であり、震災以降、森林資源の活動の自伐型林業に関心が高まり、その普及への動きが加速しています。そこで昨年から自伐型林業に取り組む NPO や企業との協働による広域ネットワークや人材育成などに取り組む「東北・広域マネジメント機構」に吉里吉里国も参画し、県をまたいで森林資源を管理し、「自律的、持続的、循環型の森林エコシステム」を目指して活動しています。これから持続的な雇用を創出する産業として展開していくには、それらを越えて連携して取り組むことに期待がかかります。

特定非営利活動法人 吉里吉里国

< 問合せ先 >
〒028-1101 岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里 3-6-28
TEL/FAX ▶0193-43-1018
E-mail▶info@kirikirikoku.org
URL▶http://kirikirikoku.main.jp